

MCLS 患児の冠動脈造影所見について

班 員 東京女子医大小児科 草 川 三 治
 協 力 者 東京医科歯科大学小児科 保 崎 純 郎
 共同研究者 都立墨東病院小児科 小 林 弘

I. 目 的

MCLS 患児の子後を支配する冠動脈病変を正確に診断し、その異常所見の変化を知るため、MCLS 患児に冠動脈造影を行い、その所見につき検討した。また、スコア表についても検討した。

1. 冠動脈造影所見

対象：MCLS と診断された 41 例で、男 27 例、女 14 例、年齢は 3 カ月から 7 才までの小児である。

成績：41 例のうち、正常例 28 例、異常例 13 例であった。異常例の内訳は両側に冠動脈瘤を認めた症例 5 例、左冠動脈のみ動脈瘤を認めた症例 4 例、右冠動脈の閉塞のみを認めた症例 1 例、冠動脈の一部に拡張、狭窄、蛇行などを認めた症例 3 例であった。なお、冠動脈瘤を認めた 9 例中 6 例に冠動脈の狭窄、蛇行も同時に認めた。

2. 冠動脈病変の変化（退縮）について

対象：第 1 回目の造影で異常を認めた 8 例につき、9 カ月～32 カ月後の間に第 2 回目の造影を行い、冠動脈病変の変化について検討した。

成績：表 1 のごとく、冠動脈瘤が消失する例、縮小する例、そして不変であった例と多彩な変化を認めた。冠動脈瘤が改善したと思われたものは症例 1～4、7～8 の計 6 例であり、不変であったものは症例 5、6 の 2 例であった。症例 1 の冠動脈病変の変化を写真 1 に示す。

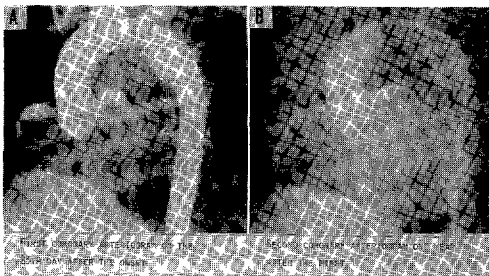


写真 1

表 1 冠動脈瘤の変化

症例	性	発病時 年 令	冠動脈造影所見	
			1 回 目	2 回 目
1	男	3 カ月	左右冠動脈起始部に大きな動脈瘤	13 カ月後 右冠動脈瘤消失と左冠動脈瘤の縮小
2	男	10 カ月	左冠動脈起始部に動脈瘤	8 カ月後 冠動脈瘤の縮小
3	男	1 年 10 カ月	左前下行枝に動脈瘤と動脈瘤の末梢に狭窄	12 カ月後 冠動脈瘤の縮小と動脈瘤の末梢に狭窄
4	男	3 年 6 カ月	左右冠動脈末梢に小動脈瘤	9 カ月後 右冠動脈瘤消失と左冠動脈瘤の縮小
5	男	4 カ月	左右冠動脈起始部に大きな動脈瘤と動脈瘤の末梢に狭窄	16 カ月後 左冠動脈瘤と右冠動脈の閉塞
6	男	9 カ月	単冠状動脈に類似した所見と左前下行枝の蛇行	12 カ月後 単冠状動脈に類似した所見と左前下行枝の狭窄
7	男	2 年 8 カ月	左冠動脈起始部に動脈瘤と左前下行枝の狭窄	32 カ月後 左冠動脈瘤消失と左前下行枝の閉塞
8	男	1 年 5 カ月	左右冠動脈起始部に大きな動脈瘤	9 カ月後 右冠動脈瘤消失と左冠動脈瘤の縮小

3. スコア表についての検討

対象：冠動脈造影を行った患児 34 例（異常例 11 例、正常例 23 例）ならびに本症による死亡例 3 例の合計 37 例である。これらの症例を対象に、浅井らが提唱したスコア表の 15 項目につき採点し集計した。

成績：冠動脈造影正常例では 5 点以下 18 例、6 点～8 点、4 例、9 点以上 1 例であった。一方、冠動脈造影異常例では 3 点 1 例、4 点 1 例、5 点 2 例、6 点 1 例、7

点2例, 8点1例, 11点以上3例であった。すなわち, 冠動脈造影異常例で5点以下であった例は22例中4例であった。なお, 死亡例では7点1例, 10点1例, 12点1例であった。

II. 考 案

我々が MCLS 患児を対象に行った冠動脈造影所見では41例中13例に異常所見を認めた。この我々の成績は他の報告者とほぼ同様の成績であった。

さらに, 冠動脈病変が如何に変化するかを2回目の冠動脈造影を行い検討したが, その成績では一部の症例をのぞき, 冠動脈瘤が縮小ないしは消失する傾向を認めた。しかし, 造影上で冠動脈瘤は縮小ないし消失するが, 冠動脈そのものが如何に変化しているか明らかでない。したがって, この点につき今後の検討が必要であろう。また, 副血行路の発達についてもさらに検討をする必要がある。

つぎに, 浅井らが提唱したスコア表は MCLS 患児の冠動脈造影の適応を決定する際, 重要な参考所見になると思われる。しかし, 我々の成績から考えると若干改善の余地があると考えられる。まず, スコア表の心拡大所見の評価が低いと思われるので, さらに重要視をする必

要があろう。つぎに, スコア表の心電図所見は後壁硬塞所見に重点がおかれているが, その点の異常所見についても考慮する必要がある。また, 心筋硬塞様症状があった場合, スコア表では2点として採点されているが, 心筋硬塞様症状があった症例に対しては冠動脈造影ないしは抗凝固剤投与の絶対的適応があると考えられる。

III. 結 語

MCLS 患児 41 例につき冠動脈造影を行い, その所見につき検討した。さらに, その内の異常例 8 例につき 2 回目の冠動脈造影を行い, とくに冠動脈瘤の退縮について検討した。また, 冠動脈造影を行った34例と, 本症によって死亡した3例のスコア表を集計して検討し, 若干の考察を加えた。

文 献

- 1) 保崎純郎, 安部信三, 吉松 彰: MCLS の心筋硬塞心電図について, 小児科臨床, 29: 1041~1049, 1976.
- 2) Hosaki J, Abe S, Yoshimatu A, Kondo N, Konno S: Observation of coronary arterial lesions in acute febrile mucocutaneous lymph node syndrome. Acta Paed Jap. 18: 8-17, 1976.

川崎病の心臓障害に関する研究

班 員 東京女子医大小児科 草 川 三 治
研究協力者 京都府立医科大学小児科 尾 内 善四郎

I. 報 告 書

① MCLS 罹患後の心筋組織の経時的変化について, 右室心筋生検により得られた材料を, 光学顕微鏡および電子顕微鏡下で観察した。本年度は8例施行したが, 前年度の報告と全く同様の所見を得たが, 新しい知見はなかった。

② High-fidelity ECG の経時的変化を検討した。最長3年間の観察で, 32例中1例を除いた全例で, QRS 波上の dicrotic notch の数が多いことが判明した。急性期を過ぎた後30例は notch の数は不変か, または次第に減少の傾向をみたが, 2例については増加する傾向を認めた。経過観察に有用なことが判明した。増加傾向

を示すものと予後との関係は不明だが, 今後の検討を要する。

③ 初回の血管撮影で冠動脈瘤を認めた4例に, 本年から2年の間に反復検査を施行した。いずれも動脈瘤内腔は不変又は減少していたが, 減少例に於ても, 壁陰影は血栓の存在を疑わせた。1例で初回存在しなかった副側血行路の発達を認めた。

④ 21例において, 運動負荷心電図を記録した。年齢は3才以上であり, 5才以上では Master's double two step test, 5才未満では膝屈伸運動を出来るだけ早く20~30回行なわせた直後, 1分後, 5分後の心電図を記録した。ST junction depression をみる以外, いわゆる ischemic ST segment depression はみられなかった。

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

.目的

MCLS 患児の予後を支配する冠動脈病変を正確に診断し,その異常所見の変化を知るため,MCLS 患児に冠動脈造影を行い,その所見につき検討した。また,スコア表についても検討した。

1.冠動脈造影所見

対象:MCLS と診断された 41 例で,男 27 例,女 14 例,年齢は 3 カ月から 7 才までの小児である。